



Title	わたしを束ねないで : 大阪・釜ヶ崎で喫茶店のフリからはじめた詩なのよ
Author(s)	上田, 假奈代
Citation	a+a 美学研究. 2025, 16, p. 40-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103417
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上田 假奈代
Kunjo Ueda

わたしを束ねないで

——大阪・釜ヶ崎で喫茶店のフリからはじめた詩なのよ

表現する、のではなく、

表現できる場をつくること

聴くことからはじまる、

そして呼びかけてみる。

そして、いつもの場所

井戸を掘る

刑務所と詩

少年院と詩

人生は一行の詩

代わりのいない一度きりの人生だから、失敗するまで詩人の仕事をしようと「詩業家宣言」をした。翌年二〇〇三年大阪市浪速区、新世界にある都市型遊園地ビル・フェスティバルゲートの空き店舗を活用した大阪市現代芸術拠点形成事業に誘われ、アートNPOココロームをたちあげた。家賃と水光熱費は市の負担だが、事業費や人件費はない。そこで元レストランに手作りの舞台をつくり、少しでも稼ぎ、誰にでも来てもらいやすいように喫茶店のフリをすることにした。大阪でアートを仕事としたい若者たちがスタッフになり、NPO法人化し、ほぼ三六五日わけのわからない表現の場を生み出しつづけた。二〇〇七年一月に市の事業は終了し、ココロームは二〇〇八年一月に西成区通称・釜ヶ崎にある動物園前商店街の小さなスナックを居抜きで借り、すぐに営業を開始した。アートセンターのような状況から一転し、スタッフは全員退職し、訪れるのは労働者、元労働者、元ヤクザ、釜ヶ崎への偏見にこだわらない人たちに変わった。

当時の釜ヶ崎には野宿生活を余儀なくされる方が大勢いたが、年齢的にも生活保護受給にうつり、受給者が急増する時期でもあった。労働者は他人と深く関わらない「不関与規範」がマナーで、気に入らなければドヤ（簡易宿泊所）を移ればよかったが、生活保護になり、引越しはそう簡単にできず、三畳一間で暮らす元労働者のおじさんたちは、酒やギャンブルで暇をつぶすことが多くなる。ココロームの外観はスナックだが、狭い店内に書や絵など貼ってあり奇妙な空間だ。やってくるおじさんたちにカルタや書、俳句作りを誘ったりするが、コミュニケーションとしては予期せぬ展開ばかりで、毎日台本のない芝居が上演されているようだった。現在もそんな日は多い。

表現する、のではなく、表現できる場をつくること

釜ヶ崎で開店してすぐ、見た目は老人だが六〇代の安藤信重さんが、毎日何度もやって来るようになった。野宿や厳しい肉体労働をしてきた釜ヶ崎の人たちは年齢以上に老けて見える。

安藤さんは店内に入って注文することはなく、誰かの隣に座って「ええ時計してんな」と言って隣の人をつねる。たいていの客は面食らい、帰ってしまう。スタッフは安藤さんを出入り禁止にしようと言うが、わたしはそうはしたくなく、でも説明もできず、のらりくらりと安藤さんにつきあった。話も聞いたが、何度も喧嘩した。店内でのワークショップに誘うが参加はしない。

一年半ほどたち、「手紙を書く会」をはじめのタイミングで入ってきた安藤さんに声をかけた。断ると思っていたのに、はじめて「書く」と言って座り、ペンを握った。しかしすぐに手が止まり、「どうやって書く？」と字の書き方を尋ねてきた。字を教えながら、安藤さんがこれまでワークショップに参加しなかった理由がわかったし、これまでの人生の苦労が想像された。そして、字が書けないことをここで話しても馬鹿にされない、もし馬鹿にする人がいたとしてもそれをたしなめる人がいることを信じてくれたのだと思った。

表現することは生きることだと思って、アートNPOをはじめた。これまで「言いなさい。表現しないと伝わりませんよ」と教わってきたけれど、だからといってできるものではない。人は安心してやっと表現ができる。安心とはその人の存在が認められること。そういう場をつくられているか、声なき声に問われた。表現と社会の関わりを探りたいと考えてきたわたしに、いちばん大事なことを釜ヶ崎の人が教えてくれた。

安藤さんの手紙の宛先は広島の子供の生活を支える施設長だった。安藤さんには障害があり、そして孤児でもあったのか。どうしたわけか福祉のサポートをうけず、労働者となり野宿も経験しながら釜ヶ崎で生きてきた。困難もたくさんあっただろう。そんな苦労をおくびにもださずたくましい存在だと思えた。

その日から、確かに安藤さんとの関係は変化し、喧嘩もするが絵を描いたり、いっしょにご飯を食べたり、出かけるわたしについてきて、いっしょに電車に乗ったり、ワークショップにも参加するようになった。そして、一六年に及ぶつきあいは終わり、安藤さんの葬式をコールドで行った。



安藤信重さんのお葬式 2023年12月

聴くことからはじまる、そして呼びかけてみる。
そして、いつもの場所

二〇一一年頃、商店街の音が変わったことに気づいた。釜ヶ崎に暮らす人たちが一挙に歳をとった。威勢のよかった足音や喋り声が減ったことに気づき、コールドムまで来てもらえなくなること案じた。そこで、おじさんたちの暮らしや馴染みの場に近づこうと、二〇一一年に「まちでつながる」という表現ワークショップを毎月一回九ヶ月間行った。建設業や解体業などの仕事の求人活動が行われる「寄り場」（寄せ場）であるあいりん総合センターのそばの会場で、扉を開けると野宿の方の毛布が敷いてあった。

釜ヶ崎の坂下範征さんはアルコール依存症で治療をはじめた時期に偶然このプログラムが重なった。全回参加し、九ヶ月間断酒し「酒をやめるのはクスリやない。人生の楽しみあつてやめるんや」と話した。それを聴いたスタッフが、釜ヶ崎の一人暮らしの人たちが定期的に集まれる講座群をつくってみようと、二〇一二年にまちを大学にみ立てる「釜ヶ崎芸術大学」（以下、釜芸）をはじめた。「学びあいたい人がいれば、そこが大学」として、年間八〇から一〇〇の講座を開き、二〇一四年、ヨコハマトリエンナーレに出展するなど、釜ヶ崎のおじさんたちの人生が花咲いた。

釜芸の初期は釜ヶ崎のおじさんたちが参加者だった。感じの悪い言動ばかりのおじさんがいた。気まずい雰囲気になっても続けてやって来るので、ある講座で「どうして釜芸に来るのか」と誰かが尋ねたときに「コミュニケーションを学びにきた」と答え、周りの人たちが妙に納得したというエピソードがある。また、話をするのが苦手の後半の発表時間になると帰ってしまうおじさんがそれでも何年も通い、そしてある時、帰らずに自分の順番が来た時に立ち上がって窓に向かって移動すると、つくった詩を小さな声で朗読した。その様子をみんなでみつめていた。

釜芸の目標のひとつに釜ヶ崎のおじさんが先生になることがあった。すこしずつそれは実現した。あちこちの高校や大学に出かけて話をしたり、釜ヶ崎に来た若者たちに向かって話をすることも増えた。大阪大学と釜芸が講座をつくるようになり、大阪大学に出かけて学生の前でおじさんたちが順番に話をしたこともある。

彼らの発表の機会は増えていくが、彼らの帰る家は三畳一間で暮らし向きが変わることはない。どんなにスポットライトが当たっても、帰って、いつもの場所があることが大事だと思う。だからコールドムや釜芸がいつもの場所としてあることをこころがけてきた。

この活動は補助金や制度があるわけではなく、誰かに頼まれたわけでもない。よって、家賃や人件費、事業費などを運営しながら生み出す必要がある、経営的にはいつも不安定だが「いつもの場所」を演じることで、関係性をつくってきた。運営に迷えば、街の音に誰かの小さな声に耳を澄まし、聴いていれば、次の一手がみえてくる。そして声にだして呼びかければ、また何かが動き出した。

二〇一七年頃からますます釜ヶ崎は変わる。おじさんたちは介護が必要になり施設や病院に行き、亡くなる人が増え、街には旅行者向けのホテルやカラオケ居酒屋が急増し、雰囲気が変わった。釜芸の参加は釜ヶ崎の外からの人がほとんどを占めるようになっていった。「最近、あのあたり、きれいになったんだね、よかったね」と言われることが増えた。悪気はないと思うが違和感を感じた。街は変わるものだ。けれど、記憶や存在した証を新しい建物に上書きされ、なかったことにされたくない。そのためにもこれまで、おじさんたちにさまざまな仕方で表現してもらってきた。でもいちばん得意な表現は建設や土木だろう。

井戸を掘る

二〇一九年、釜ヶ崎のおじさんたちに教わり、庭にスコップで井戸を掘ることにした。上下水道の整った大阪で井



釜芸、井戸を掘る 2019年



戸を掘るなんて馬鹿げている。三年余り躊躇していたのだが、二〇一六年にコールドームはゲストハウスをはじめ、清掃の仕事を釜ヶ崎の人に頼むことにした。本名もわからず、家もなぐどこで寝ているのかわからないけど毎日来て丁寧な掃除してくれるAさん、パチンコ依存症で仕事を転々としてきたというKさんが働くようになった。この二人に聞いてみると、掘るのは得意だと言う。二人が協力してくれるなら掘れるかもしれない。

アフガニスタンで井戸を掘った「ベシヤワール会」に参加していた友人の蓮岡修さんは、「地球に穴を開けるのは罪だ」と言いながらも、釜ヶ崎の井戸掘りに関わってくれることになった。

スケジュールを組んだものの大幅に延長し、半年あまりかかって、こども、若者、外国人、難民、障害を持つ人たちなど、のべ七〇〇人が井戸掘りに参加した。土を掘ることは原始的なのか、パワーが生まれる。その日、井戸の穴から出てきたその人は「人は俺のことを難民と呼ぶが、ちがう。俺は人間だ」と叫んだ。

こどもが井戸の底まで降りていくのが怖くて覗き込んでいたため息をつく。作業終了直前に勇気をふりしぼって底まで降りて土を掘った。しばらくしてドヤ顔で上がってきたこどもはおじさんのことを「先生」と呼んだ。釜ヶ崎の人ははじめてそんな風と呼ばれ、とまどいながらもうれしそうだ。最初の頃は取材に仮名で対応していたKさんは途中から、本名でいいですよ、と言うようになった。そして三七年前に家出をして以来の家族に会いに行く気

持ちになり、家族をさがしだし会いに行った。その時期、ドイツのハルトマン監督がやってきて日本で蒸発にまつわる人のドキュメンタリーを撮りたい、誰かいるだろうか、と相談され、Kさんを紹介した。そこで、一一〇以上の仕事を転々としてきたKさんがハルトマンさんと森あらたさんの映画『蒸発』（二〇二四）に出演することになった。二〇二五年にこの映画が大阪アジア映画祭に招かれた。突然、上映後の舞台挨拶に呼ばれたKさんは「あきらめないでいること、誰かに相談することが大事だと思う」と話した。

刑務所と詩

話は変わるが、釜ヶ崎で活動をはじめて、早々に気づいたことがある。この街で出会う人は刑務所に行った人が多い。

釜ヶ崎に拠点を移した二〇〇七年、映画監督の坂上香さんに死刑囚の面会に行くけど、行ってみる？ 詩にできる？ と声をかけてもらった。はじめて拘留所に出かけた。死刑という刑のため、死刑囚は刑務所にいないことも知らなかった。死刑囚にはこれまで面会してきた五人しか面会が許されない。延々とつづく塀づたいに歩き、わたしは待合室で待った。病院のような待合室には赤ちゃん連れの家族やさまざまな人たちが面会や差し入れにきていて、それらの様子を詩にした。それから、わたしはその死刑囚に手紙を書くようになり香さんに届けてもらっていた。その方のお母さんに会った。当たり前だが、犯罪被害者・加害者ともに家族や関係者がいて、人生に大きな影響がある。数年がたったある日、死刑が執行されたことを新聞で知り、もう手紙を書くことはなくなった。

釜ヶ崎では「入ってきた」「出てきた」と言えば、刑務所だ。

刑務所のなかでは何が行われ、どんな日常があるのか、想像もつかなかった。釜ヶ崎では刑務所から出てきた人を

とやかく言う空気はないが、世間ではとやかくありそうだ。

二〇一四年に香さんに誘われ、島根にある刑務所に詩のワークショップに行った。坂上香さんのドキュメンタリー映画「ブリズン・サークル」(二〇一九)の現場になった、島根あさひ社会復帰促進センターだ。この施設はTC (Therapeutic Community) とよばれるプログラムを行う日本唯一の刑務所で、グループワークによって自分のことを理解していく、新たな価値観や生き方を見出している。三〇〜四〇人ほどのメンバーに、詩のワークショップ「こころのたねとして」(二人一組になりお互い取材しあって詩をつくり、朗読する)を行った。

わたしにとっては、いつもの詩のワークショップの進行と変わらない。詩なんか書けないと思っている人に、言葉をだすって勇気が必要よね、と共感のふりをしながら、なんとか時間内に詩を書いてもらう。ようやくと詩ができあがり、発表の時間。ペアごとにみんなの前で朗読する。どつと笑いがおこったり、涙をこらえきれず、居室にハンカチを取りにいく人たちが何人もいた。感情がぐっと迫る様子はワークショップ後半によくある光景だ。

ところが、TCの時間が終わった瞬間に、刑務官が大きな号令を発した。彼らの表情は一瞬で変わり、素早く整列し指先を太腿にそろえ、順番に大声で自分の番号を発する。詩の余韻など木っ端微塵だった。

二〇一六年から大阪管区の少年院・刑務所の文芸作品の審査員をひきうけるようになり、年に一回程度、塙のなかの面会室よりも奥に視察に伺うようになった。

ロッカーにスマートフォンをあずける。内側の扉に取手のない居室、整列して歩いていく入所者。作業場に入れば、刑務官が敬礼してその場にいる人数を伝える。入所者と視察者であるわたしたちは話すことはできない。ワークシヨップをしても終われば何もなかったかのように大きな声でかき消されたが、島根あさひでの詩の時間を思い出しでは、ワークシヨップをしたい旨を管区や所長に告げるが、実現したことはない。

少年院と詩

二〇二四年、香さんから、九州の少年院での詩のワークショップの依頼を受けた。刑務所でワークショップをしてから一〇年が経過していた。

今回は香さんが企画した五回のラップのワークショップの三回目を詩で、ということだった。八人の少年と数人の教官とボランティアが集った。すでにラップのワークショップを経験していた彼らの身体はずいぶんほぐれているように見えた。そこにゲストとして、島根あさひで詩のワークショップを体験した一人が来ていて一〇年ぶりに再会した。彼は出所後、仕事を得て暮らしていて、香さんと交流をつづけていた。犯罪を犯す前の自分の境遇やそしてその後の経験を話す彼の言葉に少年たちは聴き入った。「選択肢があることを知らなかった、あの頃は」。さまざまな出会いや出来事、きっかけがあり、彼自身が考えることをあきらめなかったからこそ、出てきた言葉だった。

わたしは二つのワークを行った。一句を三人でつくる合作俳句と、二人一組になる「こころのたねとして」。合作俳句は全員に紙を配り、テーマを決めて、上五を書いて、集めてシャッフルし、誰かの書いた紙に中七を書き、また集めてシャッフルし、最後に下五でなんとか言葉の作品にする。季語も音数もとらわれない。

この日、テーマを「窓」とした。すると二人が上五に「鉄格子」と書いた。

この場所を示すことばだと、考えればわかることだが、ことばと人との結びつきを感じた。次の中七は、続きを書かずなるべく飛躍したことばを書くように、と呼びかける。すると鉄格子から世界は広がっていく。最後の下五でなんとかことばの作品になるようにまとめる。そして、最後は褒め合う発表をすることになっている。彼らは褒められるのも褒めるのも苦手そうだったが、楽しそうにすごしていた。

次は詩のワーク。二人一組になりお互い取材しあって詩をつくる。わたしとペアになった少年はインタビューを終え、休み時間が始まるやいなや「詩を書いていいですか」と聞いてきた。新しい紙を渡すと、彼は脇目もふらず詩を書いた。そこには「ごめんなさい、お母さん」から始まって、ごめんなさいが十数列ならんで書かれていた。突然あ

ふれてきたことばは、なみだが流れているように見えた。ずっと言えなかったことばだったのだろうか。休憩後、詩を書き、そして朗読がはじまった。八人の詩の声、少年の想いを汲んで作られたもう八篇の詩にもさまざまな想いが込められていて、格子の窓から射し込む光に声が重なり、光はさらに小さな粒になって空間を満たしてゆく。

わたしは、これまで詩のワークショップを何百回と重ねてきたのは、この日のためだったんじゃないか、とさえ思えた。この場に立ち会えて、詩をやってきてよかった、と思ったのと同時に、「詩」の持つ可能性をはつきりと感じた。

それから再び、香さんから翌年の冬二月と三月、同じ少年院に詩のワークショップの依頼をいただいた。前回に出会った少年も数名いたが、ほとんどがはじめてで、そして人数も一五人と多く、グループに分けて一日の午前午後と二回行うことになった。

二月には島根あさひで会った彼が再び来て、少年たちに話をした。正直に話そうとする彼の姿に少年たちは聴き入っていた。三月には犯罪被害者の方が少年たちに話をした。「役にたつ、たたないではなく、ありのままの自分を認める」ことからはじまる人生の道を自分でこつこつ歩むことの大切さが語られた。

三月の詩のワークのテーマは「ゆるしたいこと、ゆるされたいこと、ゆるせないこと」をテーマにした。わたしとペアになった少年は、生後まもなくから幼少期の壮絶な経験について話をしてくれた。さまざま人生の話を聞いてきたが、少年の話はこれまで聞いたなかでも群をぬいていて相槌をうつのも難しく、まばたきばかりしてしまった。

ふいに思い出した。「人生は不平等」という言葉を。

犯罪という事柄に社会が真に向き合うための修復的司法 restorative justice を実践するアメリカの女性を坂上香さんが連れてきてくれ、かつて釜ヶ崎でワークショップを企画したことがある。自らの生い立ちのなかで苦労があった彼女は言った。「人生は不平等で、そこからはじまる」と。彼女はアートを通して、自分自身の人生、そして加害者の少年たちに向き合っていた。

少年の話を聞いて、「俺に殺させろ」というタイトルの詩ができあがった。脚色もせず、まとめることもせず、そのまま詩にした。彼は人生が不平等だということに気づきはじめ、霧のなかにいるのだと思う。それでも目の前にいるわたしに向かって話をしてくれた。なんと答えたらいいのいか全くわからなかったけれど、詩のかたちでなら、わたしはそれに応えることができた。

三週間ほどして少年から手紙が届いた。

はじめてあの事を人に話した、と書かれていた。

想像するに、少年院での教官や先生たちの働きかけがあり、彼のところが開きかけた瞬間に、めったに外から人がやってこない少年院に何人かの大人がやってきて、さあ、と手を広げた。彼はざんぶと飛び込んで、これまで十数年間奥の方に閉じ込めていた記憶や感情を表した。

少年に返事の手紙を書く。

しばらくすれば、出院するだろう。住まいや仕事はみつかるだろうか。これからどんな出会いをするのか。誰の影響を受けるのか。どんな社会に直面するのか。社会をつくっている、わたしもそのひとりとして。

人生は不平等で、そこから始まる。

ここからは未知の道のりだ。

人生は一行の詩

釜ヶ崎では「入ってきた」「出てきた」と、まるで銭湯に行ってきたかのように話される刑務所と詩が、わたしの

なかで結ばれていく。
詩は、表現は、本来誰にでも関わるものである。生きることは表現だ。むしろ困難や苦勞を生きてきた人たち——それは支援される人と捉えられることが多い——が、こちらの奥に潜り、なんとかそれを表現するとき、人生にある鮮やかな感覚や機微に触れる深淵さがある。表現の断面にわたしはいつも励まされる。

一方、こんな活動をしていると、支援者に会うことも多い。支援者が自らのこちらのアンテナをいつも震わせていることは、難しいと思う。役割を意識し境界線をひき、じぶんの人生まで巻き込まれないようにするために、鎧をまとう。でも肩が凝って辛いのではないかしら、と思うこともある。そうした強張りをほぐすためにも、循環が生まれるような場や機会が増えることを願う。循環が生まれる機会をつくりだせたら、立ち会えたら、それは幸せなことだ。わたしは、若い頃にはじぶんへの承認と快楽のために詩をつくってきた。それはひとりよがりであっただけど、世界とわたしを取り結ぶために必要な葛藤で過程だった。そのなかで、詩の霊的精神にときおり出会えた。現実を生きているからこそ、詩はことばと、ことばにできないものでできているのだな、と納得した。そして、この歳になって、さまざまな人と詩の時間を持つことができて、あきらめずに詩をしてきてよかった、と思える。

新川和江さんの詩集『わたしを束ねないで』は、次のように結ばれる。

わたしは終わりのない文章

川と同じに

はてしなく流れていく 拡がっていく 一行の詩

人生は川のように思う。

目の前を流れている水は、同じ水はなく、たえず流れてゆく。いのちが尽きるまでの時間を流れ、そして死んでもなお、川のままに流れてゆくような。一行の詩のように、誰かのところに流れ、誰かの人生につながっていく。

わたしを束ねないで、を自らの言葉とするときには、この社会での役割や価値感を内面化しているじぶんを自ら解

き放ちつつ、声にならない声、ことばにならない想いを自由に表す身体となって、時間の川を流れていく。

上田假奈代（うえた・かなよ）

詩人。NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココローム）代表理事。堺アーツカ
ウンシル プログラム・ディレクター。大阪公立大学都市科学・防災研究センター研
究員。大手前大学非常勤講師。（一社）Prison Arts Connections 理事。